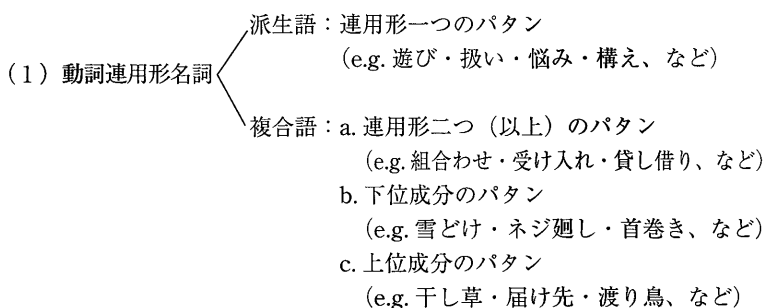


動詞連用形の名詞化とサ変動詞「する」の関係*

高橋 勝 忠

1. はじめに

動詞の連用形がそのままの形で名詞の働きをする事例が生じる (e.g. 彼は受け／育ちがいい、彼女は話し／泳ぎが上手だ)。動詞の連用形が名詞に転成するので転成名詞と呼ばれる。西尾 (1961) は動詞の連用形が名詞に転成するパターンとして、(1) のように動詞連用形だけで成り立っている名詞と動詞連用形を含んでいる名詞に分け、前者は連用形一つで成り立つものと二つ (以上) で成り立つものに分類し、後者は動詞の連用形が下位成分に含まれるものと上 (中) 位成分に含まれるものとに分けている。西尾の転成名詞の分類を派生語 (derived word) と複合語 (compound word) の基準で分けると次のようになるであろう。



本稿では西尾 (1961) で詳細に検討された「動詞連用形名詞」¹⁾の特徴をサ変動詞「する」との関係で考察する。次節では、西尾 (1961), Kageyama (1982),

影山 (1999), 岡村 (1995), 竝木 (1988), 澤西 (2003), 谷口 (2006) (2007) の意見を参考にして形態的・意味的観点から動詞連用形名詞の特徴についてまとめる。3節では、Kageyama (1982), 影山 (1993) の阻止に基づく動詞連用形名詞の捉え方を紹介し、その問題点を述べる。4節では、動詞連用形名詞の派生語は Allen (1978) で提唱されたゼロの接辞化による派生過程で生成されることを示す。ゼロ派生を前提にすると動詞連用形名詞の派生語に「する」が付加しない事実 (e.g. *遊びする, *扱ひする) は、阻止によって排除されるのではなくて高橋 (2009) の名詞範疇条件 (NCC) に抵触することによって説明ができ、派生語における動詞連用形名詞 (e.g. 遊び, 悩み) の造語力の低さや意味的特殊性がなぜ生じてくるのかを説明できることを示す。5節はまとめである。

2. 動詞連用形名詞の特徴

2.1 形態的特徴

複合語の形態的特徴は1節で述べた西尾 (1961) を始め、日英語を対照にした竝木 (1988), Kageyama (1982), 影山 (1999) が参考になる。動詞連用形名詞は複合語の中に動詞連用形を含むという視点から動詞由来複合語を形成し、語根複合語 (root compound) (= 1次複合語, e.g. 窓ガラス・灰皿) と区別される。この観点から分析すると (1b, c) のパターンは竝木 (1988: 70-71) が分類するように動詞由来複合名詞ということになろう。

(2) 押しボタン・飲み水・消しゴム・すり鉢・跳び込み台 (英語の例は省いている)

しかし主要部 (head) が動詞から派生したものを動詞由来複合名詞と考えると、² (2) のパターンは右側の主要部はボタン・水・ゴムなどの名詞なので動詞由来複合名詞ではないことになる。影山 (1999: 52) は (1c) の動詞 + 名詞の型は語根複合語に位置付けている。本稿では、影山 (1999) に従い、

動詞由来複合語は (1a, b) のパターンであると仮定する。(1c) のパターンは4節で議論するように「する」のサ変動詞を取らないことから (1a, b) のパターンから区別される派生過程であると仮定する (cf. 立ち飲みする・ラッパ飲みする・*飲み水する)。³

次に、派生語 (連用形1つのパターン) の形態的特徴を見てみよう。谷口 (2007: 62) は (3) を挙げ連用形は日本語文の中で多様な働きをし、活用形の中でも重要な形式であると見ている。⁴

- (3) a. 「～ます」形を作る：行きます／買いません／食べました
 b. 「～たい／～そうだ」等への接続：帰りたい／雨がふりそうだ
 c. 敬語表現：お読みになる／お待ちください／お持ちする
 d. 従属節を作る：顔を洗い、歯を磨く／試合に負け、引退した
 e. 複合動詞を作る：食べ過ぎる／乗り遅れる／読み始める
 f. 動詞を名詞化する：遊び／泳ぎ／踊り／食べ過ぎ／降り始め

(1) の連用形名詞と比べると、(3a-e) には文の中で「～ます」「お～になる・ください」のような丁寧表現や、「～たい／～そうだ」のような願望・様態・伝聞や、「る」の活用語尾が入っている。⁵ 寺村 (1984: 23) で指摘されているようにこれらは語幹 (stem) に加えられ、抽象的なコトを、話し手が具体的、現実的な発話として持ち出す、その持ち出し方 (ムード) を表す機能形態素である。したがって、(1) や (3f) に見られる動詞連用形は活用語尾を除いた形態論の中で位置づけられる派生語・複合語であり、文の中でムード的に導入される (3a-e) の表現とは区別しなくてはならない。

2.2 意味的特徴

動詞連用形名詞の意味に関して西尾 (1961), 岡村 (1995), Kageyama (1982), 影山 (1999) などに言及があるが、まず派生語の連用形名詞に詳細な記述がなされている岡村 (1995) の分析を見てみよう。

岡村 (1995: 74-77) は動詞が「行為・動き・作用」そのものを表しているものを「典型的な連用形名詞」とし、辞書の記述である「何々スルコト」という意味でパラフレーズするのはよくないので「動詞連用形+方 (かた) / 具合 / 加減」といった意味で捉えるべきであると主張する。例として、(4) を挙げ、(5) の解釈がなされるとしている。⁶

- (4) a. 洗濯物の乾きが早い。
 b. 船の揺れが心地よい眠りを誘う。
 c. このあたりは川の流れが早い。
- (5) a. 洗濯物の乾き方が早い。
 b. 船の揺れ具合 [加減] が心地よい眠りを誘う。
 c. このあたりは川の流れ方が早い。

谷口 (2007: 64) も動詞連用形名詞になると元の動詞の意味とは異なる解釈になる点を指摘し、例えば、(6a) は「彼は早口だ」の意味で、(6b) は「彼は物分かりがいい」と解釈されると説明する。

- (6) a. 彼は話すのが早い。
 b. 彼は話しが早い。

同様に、「彼女は読むのが早い」と「彼女は読みが早い」の間にも意味の違いが見られる。⁷

(4) (5) (6) のように動詞連用形名詞と元の動詞の意味のニュアンスが違うとなると、影山 (1982: 225) で説明するように「*遊ぶ」は「遊ぶ」によって阻止 (blocking) されるという捉え方は、「する」を軽動詞とし、「遊び」と「遊ぶ」が基本的に同じ意味をもっていることを前提とするので「遊び」と「遊ぶ」の意味のおつかりとして捉えることは不自然になるであろう (cf. 子供は外で遊ぶのが好きである (? 子供は外の遊びが好きである)、大人は

夜の遊びが好きである（? 子供は夜に遊ぶのが好きである）。この問題は次節で再度取り上げる。

次に、複合語に含まれる連用形名詞の意味について見てみよう。ただし、(1c)のパタンについては上で述べたように語根複合語なのでサ変動詞「する」を取らないと考え、複合名詞の意味についてはここでは触れないでおく。⁸したがって、動詞由来複合語パタンの(1b)の意味について Kageyama (1982), 影山 (1999) に従い紹介する。⁹

Kageyama (1982:222) は(1b)の動詞由来複合名詞をその意味により次の6つのタイプに分ける。

- (7) a. 活動 (activity): 人助け, アパート住まい, 寺詣り, 朝帰り
- b. 結果・産物 (result・product): 野菜炒め, 水溜り, 紙包み
- c. 動作主・人 (agent・person): 嘘つき, バイオリン弾き, 金持ち, 酒飲み, 髪結い
- d. 道具 (instrument): ネジ回し, 缶切り, 筆入れ
- e. 場所 (place): 手洗い, 車寄せ
- f. 時 (time): 日暮れ, 夜明け, 昼過ぎ

影山 (1999:119) の分類は(7)と並行するところが多いが、モノ名詞とデキゴト名詞の観点から動詞由来複合名詞を分けている(英語の例は省く)。

- (8) モノ名詞
 - a. 結果・産物: 虫さされ, 虫食い
 - b. 人間: 金持ち
 - c. 道具: 爪切り
 - d. 場所: 犬走り (建物の軒下などでコンクリート敷きにした部分)
- (9) デキゴト名詞
 - ワックスがけ, ゴミ捨て, 胸騒ぎ

Kageyama (1982:225) は「活動」(nominalization compounds which denote

activities) は「する」を取るが、「道具」「動作主」「場所」(the compounds which designate concrete objects such as instruments, agents, and places) は「する」を取らないと説明する (e.g. *服掛ける、*金持ちする、*犬走りする¹⁰)。しかし、(7e) の「場所」の例には「手洗い(を)する」「車寄せをする」の「活動・行為」の意味も含まれる。ただし、「手洗いする」が正しい読みとなるには「何かを手で洗う」という意味で、「御手洗い」の「場所」ではなくて「手」を副詞的な手段の意味として用いられる。Kageyama (1982) では、(7b) の「結果・産物」や (7f) の「時」のケースについての言及がないので「する」を取るかどうかの基準は明確でないが「? 野菜炒めする」「? 水漏りする」「*紙包みする」「*日暮れする」「*夜明けする」「*昼過ぎする」は不自然だが、「油炒めする」「水漏れする」「梅雨明けする」は可能である。いずれにしても、(1b) のパタンの前部要素が副詞的要素 (adverbials) である場合はそれが「時」「道具」「場所」「人」であっても「する」を継承するようである (e.g. 昼寝する、水遊びする、川遊びする、親離れする)。¹¹

3. 影山 (1993) の分析の問題点

Kageyama (1982:223) は動詞由来複合名詞が (7) のように多様な意味をもたらすのは統語的に派生されるのではなくて語彙的規則 (lexical rule) によって生成されるからだと説明する。動詞連用形の名詞化は (10) のように語彙素性に変化し、結果として動名詞 (verbal noun) となり「する」が継承できると仮定する。

(10) Nominalization

[+V, -N, -A] → [+N]

影山 (1993:181-183) は Kageyama (1982) の (10) における二値的範疇素性の値 (±) の切り替えという方法を継承している。本節では、その分析の問題点を指摘したい。

1 節で述べたように (1) における動詞連用形名詞の派生語に「する」が付加すると容認されなくなる。

(11) *読みする、*探しする、*起きする、*しまいする

影山は (11) の表現が不適格となる理由として「もともと述語であったものをいったん名詞化し、更にそれを述語に戻すのは言語の機能からすると不経済である。」ということから (11) の表現が「読む」「探す」「起きる」「しまう」によって阻止されると仮定する。例えば、「読む」は「読み」になると (12) のような素性の切り替えが生じると仮定する。

(12) 「読む」[-N, +V, -A]—名詞化→「読み」[+N, +V, -A]

影山は「彼の読みは鋭い」となれば (13) のように完全な名詞に変換されると仮定する。

(13) 「読む」[-N, +V, -A]—名詞化→「読み」[+N, -V, -A]

このように仮定することによってまず問題となるのは同じ「読み」という表現に対する (12) (13) の2つの素性があるという点である。影山は (12) の「読み」が動名詞の性格をもち、名詞性 (+N) と動詞性 (+V) の両方の素性があると仮定する。一方、(13) の「読み」には名詞性 (+N) しかなく、動詞性 (-V) は無いと仮定する。

確かに、動名詞の両極性を備えていることは次の例を見れば分かる。例えば、「～人」の「じん」と「にん」の漢語・和語の選択 (e.g. 知識人、宇宙人、

世話人、受取人、*読み人、*探し人、cf. 遊び人)の区別や、「～上手」の「聞き上手」「木登り上手」「*楽器上手」の容認性の違いから動名詞が動詞性(+V)をもち、一方、「～用」や「～方」の接尾辞と基体の選択方法を見れば動名詞が名詞性(+N)をもつことが理解できる。

- (14) a. 自転車用、拳銃用、敷物用、パソコン用、テレビ用
 b. 料理用、解説用、夜遊び用、食べ歩き用、山登り用
 c. *食べ用、*飲み用、*扱い用、*遊び用、*歩き用、*登り用
 (15) a. *自転車方、*拳銃方、*敷物方、*パソコン方、*テレビ方
 b. *料理方、*解説方、*夜遊び方、?*食べ歩き方、*山登り方
 c. 食べ方、飲み方、扱い方、遊び方、歩き方、登り方

すなわち、(14)では(a)(b)の比較から、動名詞「～用」の基体に名詞性(+N)を要求し、(15)では(b)(c)の比較から、「～方」の基体に動詞性(+V)を要求するため(a)(b)が排除される。¹²

しかしながら、(14)(15)の(b)の基体には「する」が付加して、「料理する」「解説する」「夜遊ぶする」「食べ歩きする」「山登りする」¹³がすべて認められることから考えると、上で述べた「～人」「～上手」と「～方」「～用」の動名詞の両極性は付加される側からの要請を問題にして分析し記述しているにすぎないことになる。すなわち、Plag (1996)の“base-driven”のアプローチをしている。付加する接辞側からみれば(i.e. “affix-driven”のアプローチに従えば)、「する」は両極性をもたない軽動詞で、(16)のように名詞を範疇選択すると単に記述できる。¹⁴

- (16) 「～する」: V, [+N ___] (ただし、Nの範疇は「活動」「行為」を表す漢語動名詞と動詞由来複合名詞である)

次に影山(1993)の分析で問題となるのは、(12)の動詞連用形名詞の素性の切り替えを行った段階は[-N]から[+N]の変化と同時に、[+V]が保

持されている点である。これは動詞連用形名詞が単独では用いられない理由で複合語を要求する根拠に挙げているが、なぜ名詞化すると単独には用いられなくなるのかの説明はなされていない。また、(17) のような実際に存在しない動詞連用形名詞をその複合語形成の前提に置いているのも問題である。¹⁵

(17) *探し (あら探し)、*起き (早起き)、*しまい (店じまい)

影山は「*読みする」が「読む」に同義的理由で阻止されると仮定するので、「読み」が[+N]と同時に[+V]をもち、「する」は軽動詞で意味的には「読む」が「*読み」を阻止することになる。同様に、(17) では「探す」が「*探し」を、「起きる」が「*起き」を、「しまう」が「*しまい」を阻止する。形態的には、動詞が名詞を阻止することになり、実際の語としては存在する語が存在しない語を阻止すると言っていることになる。また、(17) のように単独では動詞連用形名詞が用いられない場合でも複合語にすると新たな情報が加わることで、「する」が付加できると仮定するが(e.g. あら探しする、早起きする、店じまいする)、複合語になっても容認されない例が存在する。

(18) *捨て (*ゴミ捨てる、*切り捨てる、*脱ぎ捨てる、cf. ポイ捨てる)

4. Allen (1978) のゼロ派生による分析

Allen は接辞を付加しないで範疇を変化させる ϕ (ゼロ) の接辞化を仮定する。例えば、(19) の語は左側と右側で範疇が異なっている (Allen1978:272)。

(19) a.	figure _N	figure _V	b.	respect _V	respect _N
	gesture _N	gesture _V		support _V	support _N
	condition _N	condition _V		exhaust _V	exhaust _N
	fracture _N	fracture _V		affect _V	affect _N

NとVのどちらを基本においてゼロ派生化されるかの議論は Marchand (1960), Kiparsky (1982) (1983) でもなされてきたが、Allen は (19a) では N を基本に置き、(19b) では V を基本において考える。すなわち、(20a, b) のようなゼロ派生化がなされると仮定する。¹⁶

- (20) a. $[[X]_N \phi]_V$ b. $[[X]_V \phi]_N$

Marchand (1960) も接辞の付加された語からのゼロ派生は許されない事実を指摘し、その許されない理由として3節の(11)の例に対して影山が指摘したように「同じ品詞のものを2度生み出すのは理に合わないからである」という阻止の考え方を示唆している (Marchand1960:302)。

- (21) a. * $[[[\text{improve}]_V\text{-ment}]_N \phi]_V$
 b. * $[[[\text{free}]_A\text{-dom}]_N \phi]_A$

しかし、島村 (1987:162) が指摘するように接辞の付加された語からゼロ派生が生じる例として (22) があり、それらは本来動詞がもっている意味 (i.e. 「与える」、「求める」、「掃除する」) と異なる動詞の意味をもたらす結果、阻止が働かなくなると指摘する。

- (22) a. allowance (人に飲食物などを一定の量に制限して与える)
 b. beggar (～を貧乏にする)
 c. sweeper (the floor) (～を掃除機で排除する)

これら (22) の例は (21a) と同じように内部構造で分析すると (23) になるが、共通して $V \rightarrow N \rightarrow V$ の方向性をもっている。

- (23) a. $[[[\text{allow}]_V\text{-ance}]_N \phi]_V$
 b. $[[[\text{beg}]_V\text{-er}]_N \phi]_V$
 c. $[[[\text{sweep}]_V\text{-er}]_N \phi]_V$

(21) (23) の容認性の違いはゼロ派生語の動詞が元の動詞の意味とは異なる新しい語彙化した意味をもつかどうかにより左右されると考えるが、(11) の例に対してこのゼロ派生化の過程を援用してみると (24) のようになるであろう。

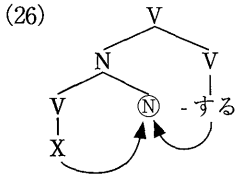
- (24) *[[[読む]_vφ]_N-する]_v *[[[探す]_vφ]_N-する]_v
 *[[[起きる]_vφ]_N-する]_v
 *[[[しまう]_vφ]_N-する]_v

(24) において、元の動詞は名詞化されて「(*)読み」「*探し」「*しまい」に変化し、(12) のように動名詞の素性をもつが、基本的にはこれらの名詞化は一部の語彙化したものを除き排除されなくてはならない。3節で言及したように、影山の阻止による分析では存在しない語を前提に「する」表現が付加できないことを阻止として位置付けている。通常、阻止というのは depth が (?) deepness を、yesterday が (?) last day を阻止するように阻止される側の語句も可能な語であって存在しない語ではない。しかし、*[[[X]_vφ]_N-する]_v の表現はどれも不可能になることから考え合わせると (24) のような組み合わせは体系的に存在しない派生語の組み合わせであると思われる。

高橋 (2009:175) は派生語の組み合わせを排除する一般条件として (25) の名詞範疇条件 (NCC) を提案した。

- (25) NCC: 最終節点にある名詞範疇 (N) は、動詞 (V)・形容詞 (A)・名詞 (N) のいずれかの範疇により、二重に c 統御されてはならない。

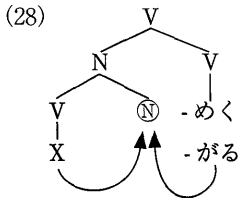
この NCC の条件を (24) の例に当てはめると (26) の内部構造が与えられ、矢印のように名詞範疇のⓃが2つの動詞 (V) によって二重に c 統御され、結果として (24) の例が NCC に抵触し排除されることが理解できる。



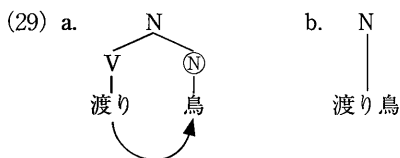
(25) の NCC は妥当なものかについては高橋 (2009) を参照していただきたいが、今 (24) と同じように、本来動詞であるものが名詞に転成化され、さらに動詞化が可能かどうかについて、他の接尾辞 (e.g. 「～めく」「～がる」) について検証してみると (27) のような結果を得る。

- (27) a. *読みめく、*探しめく、*起きめく、*しまいめく
 b. *読みがる、*探しがる、*起きがる、*しまいがる

「～めく」「～がる」は本動詞で「する」の軽動詞とは異なる。(27a, b) の派生語を排除する元の動詞とは当然意味が異なっている。したがって、(11) で見た影山の阻止分析による方法ではこれらの派生語の逸脱性を説明できない。これらの派生語が排除される理由を考えてみると、個別に「～めく」「～がる」が動詞の基体に付加しないという制限で説明が可能になるように思われるが、動詞連用形名詞に (24) の構造を仮定する限り、「～めく」「～がる」の派生語にも (28) のような構造があり、その構造に何らかの制約が働いていると考えなければならなくなる。NCC は (26) と並行して (27a, b) の事実を (28) の内部構造から説明することができる。

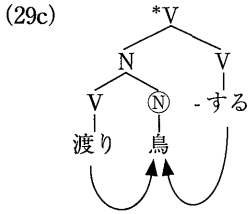


1節で見た(1c)の複合語(e.g. 渡り鳥)が「する」を取らないのは、(29a)の基底構造(=深層構造)から語彙化が生じて(29b)の語彙的名詞への変換が生じ、結果として複合語が動名詞の解釈ができなくなるからである。

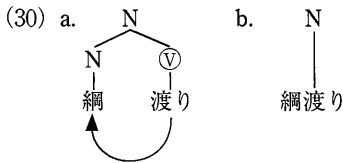


右側の主要部が名詞で、左側の要素に動詞連用形が含まれる複合語の殆どが(8)で示したモノ名詞の意味をもち、「場所」「人」「動物」「植物」「道具」などの純粋な名詞の意味をもつ(e.g. 行き先「場所」、売り先「人」、飼い鳥「動物」、枯れ草「植物」、消しゴム「道具」)。¹⁷ (1c)の複合語が動詞由来複合語とならず語根複合語として分析されるのはこのようなモノ名詞化の意味的制限があるからであろう。しかし、なぜそのようなモノ名詞の意味が(1c)には生じてくるのだろうか。この事実は右側の要素に動詞連用形が含まれる場合とは対照的である(e.g. 網渡り(する)、値上げ(する))。

NCCの観点からその理由を考えてみると、仮に「渡り」に動名詞の解釈があると仮定するなら(1c)の複合語は(29a)の内部構造を保持し、左側要素の連用形名詞の動詞性が残されることになる。結果として「する」を付加する段階で(29c)の内部構造となり、(25)のNCCの組み合わせ制約に違反する構造となる。したがって、NCCの構造に抵触しないようするにはモノ名詞の語彙化が義務的に生じて(29a)の内部構造は(29b)の語彙的名詞に変換されることになる。(29b)は動詞性がなくなるので動名詞の意味も生じなくなる。結果として、「する」が付加されないことが分かる。



他方、「網渡り」の基底構造は (30a) で、そこから「する」を付加する段階に (30b) に内部構造が変換される。(30b) の構造は (16) の下位範疇化素性と N の「行為」という動詞由来複合語名詞の意味制約を満たすので、「する」が付加され「網渡りする」が正しく派生される。

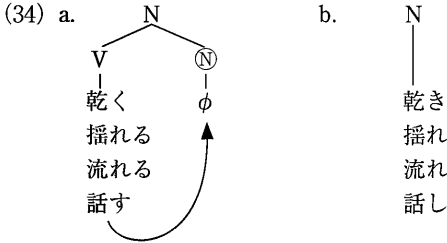


最後に、(4) や (6b) の連用形 1 つの表現がどのように派生されるかについて言及してみよう。

- (31) = (4) a. 洗濯物の乾きが早い。
 b. 船の揺れが心地よい眠りを誘う。
 c. このあたりは川の流れが早い。
- (32) = (6) b. 彼は話しが早い。

これらの派生語は動詞からゼロ派生によって生成されると仮定する。高橋 (2009:175) の NCC の含意として (33) があり、(34a) のようにⓃの名詞範疇が 1 回だけの c 統御により派生され、その後 (34b) のように語彙化が生じて内部構造が語彙的名詞に変換され、(31) (32) の派生語が正しく生成されると仮定する。

- (33) NCC の含意：派生語は動詞 (V)・形容詞 (A)・名詞 (N) の範疇が
名詞範疇 (N) を c 統御しながら生成される。



英語の動詞から名詞へのゼロ派生は名詞から動詞へのゼロ派生に次いで多いことが指摘されている (竝木1985:63)。それに比べて、日本語のゼロ派生は (31) (32) のような動詞から名詞への連用形1つの派生語の例は少ないことが知られている (西尾1961)。(31) (32) のような転成名詞化の生産性が低い理由として考えられるのは、連用形は (3) で挙げた文の機能的要素 (e.g. 「～ます」「～たい」) と結合する傾向が強く、ゼロ派生で転成名詞化される例は元の動詞とは違った意味で使われない限り、動詞の活用形として見られる可能性が高くなるからではないかと思われる。しかも、「動詞連用形名詞」の連用形1つの派生名詞化の内部構造は動詞由来複合名詞と異なり、転成名詞化されたあとも (12) のように動詞の素性 (+ V) が残され、(34a) のような構造が継承されるので「する」付加の際に NCC に抵触するということも (34b) の語彙的名詞の生産性が低くなる要因であるように思われる。

5. おわりに

西尾 (1961:193-194) によると、動詞連用形名詞の動詞から名詞を引き出す語形成の形式はかつては活発だったが、漢語が導入されることにより和語の造語力の弱さを反映するようになったことが記されている。結果として、

用言から名詞形を引き出す必要性は複合語の和語のパタンを除いて少なくなつたものと予想される。

本稿では西尾(1961)の動詞連用形名詞の分類に従い動詞連用形名詞の派生語が「する」を継承できない理由を考えてきた。Kageyama(1982), 影山(1993)の阻止分析による方法は問題が生じることを述べてきた(3節)。阻止に代わる方法として、高橋(2009)のNCCが「*探しする」「*遊びする」の不適合性を説明できることを示し、NCCは「*起きめく」「*読みがる」の表現や「*渡り鳥する」の(1c)の動詞連用形名詞も同様に排除できることを主張してきた(4節)。

本稿では、(1a)の動詞連用形が二つ(以上)重なる複合動詞のパタンについて言及しなかった。また、影山(2003:218)で指摘する単純事象名詞の「*交通渋滞する」「*資金不足する」や影山(2003:216)で指摘するS構造複合語の「*洋書:購入する」「*ホテル:予約する」の表現についても言及しなかった。これらの語の分析は別の機会に譲るが、NCCの制約がこれらの内部構造についても正しく逸脱性を予測できることを示唆しておく。¹⁸

注

*本稿は、3月12日に関西学院大学(ハブスクエア大阪)で開催された関西レキシコン・プロジェクト(KLP)の席上で口頭発表したものに基づいている。

1. 「動詞連用形名詞」という表現は、西尾(1961)で最初に用いられた(1)のパタンの動詞連用形の名詞化の表現を指し、本稿でも西尾の「動詞連用形名詞」という言い方を採用する。西尾は「貸し借り」「上げ下げ」の対立する概念が並列する場合と「売れ行き」「飛び読み」のように動詞形が存在しないもの(e.g. 「*貸し借る」「*売れ行く」)を別の分類に分けているが、本稿では形式的に(1a)のパタンに入れておく。
2. Roeper and Siegel(1978), Selkirk(1982)を参照。
3. 「買い物する」「探し物する」「洗い物する」が一見よさそうに思えるが、「を」格を省略した表現であろう。なぜなら、「?買い物した」「?探し物した」「?洗い物した」には「を」格が義務的に必要になるからである。Cf. Kageyama(1982:225), 影山(1993:269)。
4. 谷口(2007:62)は(3f)の動詞連用形のパタンを動詞的な場合(e.g. 泳ぐ)と名詞的な場合(e.g. 泳ぎ)に分け、両者の意味機能の違いを観察している。形態的には、動

- 詞がゼロ派生し、名詞に転換する過程である。
5. 澤西 (2003) は、(3d) のテ形、「顔を洗って、歯を磨く／試合に負けて、引退した」と動詞連用形、「顔を洗い、歯を磨く／試合に負け、引退した」のボタンを比較し、容認度の違いを状況別に比較している。
 6. 岡村は「動詞+こと」は遠心的な具象化を、連用形名詞は「行為・動き・作用のさま」に焦点を当てることから求心的な具象化を担っていると解釈するが、言っている内容が抽象的で捉えにくい。形態的には句レベルと語レベルの違いである。
 7. ここで、「彼は話しが早い」「彼女は読みが早い」の意味は岡村が指摘する「話し方」「読み方」ではないことに注意したい。むしろ元の動詞 (i.e. 話すのが、読むのが) の方にその意味が見られ、連用形名詞は語彙化した意味になっている。岡村 (1995:79) は「話し」は行為の内容を表すので「典型的な連用形名詞」としては扱わないとしているが、それは「彼は話が面白い」の文における解釈であって「彼は話しが早い」には「物分かりがいい」と「話し方が早い」の両方の解釈が可能で、後者の意味では彼の言う「典型的な連用形名詞」に属している。述語形容詞が動詞連用形名詞の意味決定に何らかの影響を与えるものと思われる。
 8. 影山 (1999) の第4章には特質構造 (Qualia structure) の観点から語根複合語の興味ある意味分析がなされているので参照のこと。
 9. (1a) の動詞由来複合動詞の意味については本稿では触れないでおく。姫野 (1999) を参照のこと。
 10. 「*犬走りする」は Kageyama (1982) では言及されていないが、影山 (1999) の例を付け加えた。
 11. 本稿での「する」表現が可能かどうかの判断は明鏡国語辞典とデジタル大辞泉に基づく。いずれかの辞典に「する」表現が記載されていれば、その表現が可能であると判断する。記載がなければ存在しないとみなすが、すぐに不可能であるかどうかは判断できない。多くの人の言語直観の内省的判断に頼らなければならない。「親離れする」は両辞典に「する」表現が記載されていないが、可能だと思われるので載せた。
 12. 影山 (1993:27) は「～方法」が「する」と同様に動名詞に付加できると仮定する。影山はすべての動名詞が「～方法」に自由に付加できないことは認めているが、「*遊び方法」や「*自動車方法」の動詞連用形や名詞に付加する場合における文法的に不可能なものとは区別し、動名詞が「～方法」に付加するケースを可能な複合語として認めている。しかし、「する」がすべて可能な表現でも「～方法」は簡単に付加しない (cf. 「?料理方法」、「?解説方法」、「*夜遊び方法」、「*食べ歩き方法」、「*山登り方法」) ので、「する」「～方法」を同列に位置付けることは問題であり、「～方法」の基体の何らかの形態的・意味的制約を考慮する必要があるであろう。
 13. 影山 (1993:270) は「山登り」は単純事象名詞として位置付け、「～をする」構文が成り立つと仮定するが、「山登りする」「里帰りする」のような表現が可能であるので、自動詞的には複雑事象名詞と本稿では位置付けたい。
 14. Plag (1996) の “base-driven” のアプローチの問題点については高橋 (2009) を参照のこと。
 15. Allen (1978) の分析のように、実際に現れない語を基に派生語が形成される過剰生

成形態論 (Overgenerating Morphology) の立場はあるが、問題点も指摘される (高橋 2009: 30)。

16. Allen はレベル順序付け仮説に基づく方法でゼロ派生の方向性を規定している。詳細は高橋 (1992) を参照のこと。
- 17 影山 (1993: 184) は和語動詞の連用形+名詞の例を多く挙げている (e.g. 入れ歯、入れ知恵、置き手紙、買い物、書き物など)。これらの例は具体的なモノを示す意味とそこから拡張して行為を示す意味があるという。影山はここで右側主要部の原則を主張する根拠を示しているが、これらの例に対して「～をする」はすべて可能であるが、「～する」は不自然な場合も含まれている (e.g. *突き指する)。注の3で述べたように、(1c) のパターンで「行為」を表す複合語 (e.g. 買い物する) は「～をする」から「を」格を省略して派生されると仮定する。
- 18 スペースの関係上、これらの語について詳細に述べられないが、ポーズやアクセント型の音韻的要因や、左側要素の構造格と固有格の違いによって、内部構造の変換を引き起こす場合と引き起こさない場合が生じて、その結果 NCC に抵触したりしなかったりするものと思われる。

参考文献

- Allen, Margaret. 1978. *Morphological Investigations*. Ph. D. dissertation, University of Connecticut.
- 姫野昌子. 1999. 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.
- 影山太郎. 1978. 「漢語動詞と変形の必要性」『言語』7. 大修館.
- Kageyama Taro. 1982. "Word Formation in Japanese." *Lingua* 57, 215–258.
- 影山太郎. 1993. 「文法と語形成」ひつじ書房.
- 影山太郎. 1999. 『形態論と意味』(日英語対照による英語学演習シリーズ2) くろしお出版.
- Kiparsky, Paul. 1982. "Lexical Morphology and Phonology." In *The Linguistic Society of Korea* (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, 3–91. Seoul: Hanshin.
- Kiparsky, Paul. 1983. "Word-Formation and the Lexicon." In Frances Ingemann (ed.) *Proceedings of the 1982 Mid-America Linguistics Conference*. Lawrence, Kansas: University of Kansas, 3–29.
- Marchand, H. 1960. *The Categories and Types of Present-Day English. Word-Formation: A Synchronic-Diachronic Approach*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- 竝木崇康. 1985. 『語形成』(新英文法選書2) 大修館書店.
- 竝木崇康. 1988. 「複合語の日英対照—複合名詞・複合形容詞—」『日本語学』7–5, 68–78.
- 西尾寅弥. 1961. 「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』43, 60–81.
- 岡村正章. 1995. 「「典型的な動詞連用形名詞」に関する一考察」『上智大学国文学論集』28, 73–89.

- Plag, Ingo. 1996. "Selectional Restrictions in English Suffixation Revised: A Reply to Fabb (1988)." *Linguistics* 34, 769–798.
- Rooper, Thomas and Muffy E. A. Siegel. 1978. "A Lexical Transformation for Verbal Compounds." *Linguistic Inquiry* 9, 199–260.
- 澤西稔子. 2003. 「動詞・連用形の性質」『日本語・日本文化』29, 47–66.
- Selkirk, Elizabeth. 1982. *The Syntax of Words*. Cambridge. MIT Press.
- 島村礼子. 1987. 「『語彙化』について」『津田塾大学紀要』第19号, 155–173.
- 高橋勝忠. 1992. 「語形成における名詞範疇条件」『英文学論叢』35, 53–75.
- 高橋勝忠. 2009. 『派生形態論』英宝社.
- 谷口秀治. 2006. 「動詞連用形の用法について」『大分大学国際教育研究センター紀要』第3号, 57–66.
- 谷口秀治. 2007. 「動詞的な言い方と名詞的な言い方」『大分大学国際教育研究センター紀要』第1号, 61–70.
- 寺村秀雄. 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- デジタル大辞泉. 2009. 小学館.
- 明鏡国語辞典. 北原保雄編. 2002. 大修館書店.